

動き出した 東北

— ③ —

東北大学金属材料研究所 川添研究室

仙台市青葉区片平に位置する東北大学金属材料研究所。あの日、計算材料科学の第一人者である川添良幸の研究室は激しく揺れた。

ため無事だったが、7階の川添研究室は書物類が飛び散り、手が付けられない状態になっていた。

リフレッシュランで少し遅い昼食を取っていた。地震に遭遇したのはその時である。

いから戻っておいで」と川添は優しく送り出した。原発事故が明らかになるにつれ、一時期、外国人が日本から掻き消えたかのように姿を消したこ

しかし、それは誤解で、実際は違つた。仙台が原発事故現場から50マイルの範囲内にあるというだけで、各国の政府が動いたのである。各国政府の発した日本

いた。しかし「地震後は寂しい研究室になつてしまった」という。地震の混乱が少し落ち着いた。着き始めた4月上旬、各国政府も状況を理解し始めた。留学生が一人二人と研究室に戻り始めた。マヒューディンも例外ではない。

スーパーコンピュータは一階に設置していた



川添良幸教授(右)、マヒューディン氏

元に戻った国際色豊かな研究室

人としての生き方も教える教育方針

時を同じくして、インドネシア出身の国費留学生、川添研究室修士課程2年のムハマド・ハリス・マヒューディンは、大学近くのイタ

らの国外退避勧告だ。仙台から成田空港までのバスも、成田からインドネシアまでの飛行機も、政府がチャーターするといつ。戸惑つマヒューディンに、「いつでもい

とがあつた。それだけではない。東日本に開設していた現地法人をクロールし、西日本に移転した外資企業もあつた。その足並み揃えた行動に、我々日本人は裏切られたよな思いを持ったものである。

からの国外退避勧告に従い、マヒューディンと同様に多くの外国人が日本を去つたに過ぎない。日本のみならず、世界の計算材料科学の水準を上げよつという志を持つ川添。それだけに彼の研究室は国際色に彩られて

インドネシア地震の体験を持つマヒューディンは、4月上旬からボランティア活動にも意欲を見せた。毎週土曜日、1チーム5、6人の編成で鮎川浜、気仙沼、東松島、多賀城を訪問。炊き出しでイン

計算材料科学の難しさや厳しさを教えるのは教職者として当然のこと。それと同時に、人間としての生き方も教える川添の教育方針を垣間見たよくな気がした。マヒューディンは関西の大手電機メーカーに就職が決まった。今年9月、マヒューディンは川添の元を巣立ち、新たな人生を歩み始める。

(文中敬称略)
(産業タイムズ社 事業開発部 松下晋司)